

★佐高信の甘口でコンニチハ!

Guest

神田香織

(講談師)

kanda-kaori

平和を語り続ける

神田さんは福島県いわき市出身。東日本大震災ではご実家が津波の被害に遭われた。震災以前から、戦争・原発問題に取り組み、『はだしのゲン』『チェルノブイリの祈り』などを講談にして語り続けてきた。だからこそ、「3・11」以後の現状は悔しい、と神田さんは憤りを見せる。

Guest

神田香織

(講談師)



平和を語り続ける

講談師とジャーナリズム

佐高 香織さんの故郷は福島県のいわき市でしたね。

神田 はい、小名浜の近くの泉町というところです。

佐高 小名浜の辺りはみんな津波にやられてしまいましたか。

神田 全部ではないですけど、ほとんどやられましたね。海岸線がとてきれいだっただんですが……。

私の家は、昔は潮騒が聞こえてくるくらい海に近かったのですが、石油コンビナートが出来て埋め立てられてしまいました。でも、そのおかげで津波は大丈夫だったんです。

佐高 心配したでしょう、当時。



かんだ・かおり / 講談師

1954年福島県いわき市生まれ。

福島県立磐城女子高校卒業。1980年二代目神田山陽門下生に。ジャズ講談や一人芝居の要素を取り入れた独自の講談を次々発表、講談の新境地を切り開いている。主な講談に、『はだしのゲン』（日本雑学大賞受賞）『安寿と厨子王物語』『チェルノブイリの祈り』『フラガール物語』などがある。2010年女性人権活動奨励賞（やより賞）受賞。近著に、『花も嵐も、講談師が語ります』（2005年七つ森書館）、『乱世を生き抜く語り口を持って一新作講談の創り方語り方』（2010年 インパクト出版会）など。

ご家族は大丈夫だったんですか。

神田 はい、当日は避難所に一泊したそうです。連絡がつかず眠れませんでした。近所の家はほとんど全壊で、更地になってしまいました。うちはなんとか半壊ですみ

ましたが、父は「うちだけ建って

いて申し訳ない」としよぼしよぼしています。家を建てる時、非常に腕のいい棟梁に頼んだんですよ。でも、とても大酒飲みの人で、当時高校生だった私は、困った人だ

など思っていました。でも、その棟梁は、「この家が丈夫なのは、時が経てばわかる」と言っていましたね。

佐高 その方はもうお亡くなりには？

神田 そうですね、大分前に。一升瓶を提げながらでも、いい仕事をしてくださったんですね。

佐高 香織さんとの出会いは、今は原発の避難区域になってしまった富岡町の、夜ノ森でしたね。

神田 そう、桜が綺麗な。あそこがまさにやられてしまつて……。放射線量が高くて、もうしばらくは入れないんじゃないでしょうか。今年の桜も、誰にも見られずに散っていくのでしょうか。

佐高 神田さんは、もともと講談で『はだしのゲン』や『チェルノ

ブイリの祈り」をやられてきましたね。

神田 はい。ですので余計に残念ですし、悔しいです。

佐高 「チエルノブイリの祈り」を講談にしようと思ったのは、どうしてですか。

神田 本を読んだら涙が止まらなくて、その時、講談にしようと思いました。十年前のことです。著者はベラルーシの女性作家で、スベトラーナ・アレクシエービッチという方。彼女が、現場に関わった人やその妻たちにインタビューをして、それを一人称で書いたものです。講談に取り上げたものは、消防士夫婦の実話です。消防士のご主人が、チエルノブイリ事故の消火活動で被曝して、家に帰れずモスクワの病院に入るんです。

ね。彼は、七シーベルトの放射能を浴びていたので、二週間以内に死ぬ運命にあった。生きる原子炉状態になってしまった。でも、奥

さんは夫のことが好きだから、最期まで側にいるんです。夫が死んで、自分も被曝したんですが、当時、お腹に六ヶ月の子どもがいて、そ

の子がお母さんの放射能を全部引き受けて生まれ、四時間後に亡くなってしまふ。そんな悲しい話を「愛」をテーマに語っています。

震災前、福島にも原発はあるので、同じような事故が起こったら大変だと思っていたんです。

佐高 香織さんは、いわゆる社会派講談師なんですか。

神田 そういう意識はないんです。もう、二十六年前になりますが、サイパンに行つて戦跡を見て、戦

争のことを考えて、「語り継いでいった方が良いんじゃないか?」と思つて講談にし始めたんです。で

も平和のことを語ると、当時は「共産党?」とか「赤い講談師」とか言われました(笑)。

けれど戦争は嫌で、原爆は怖いって、そういうことは政党関係なしに多くの国民が思っていると思うんです。「はだしのゲン」を語り始めてから理不尽な目に遭つて殺された方に感情移入するようになりました。講談はもともと「強きをくじき弱きを助ける」というぐらいで、講談師というのは昔からジャーナリストでもあるんです。世の中の不正を訴えて処刑された人もいたくらいですから、本来はすごく幅が広いはずなんです。今は伝統芸として古典をやるのが

主流で、私は変わり者扱いなんですよ。でも、元はと言えば、『忠臣蔵』もテロリストの物語で、今はそれを古典としてやっていますから。新しいことを恐れず、どんなやつていけばいいと思うんですよ。

女医レニヤの精神

佐高 元旦那さんのお父さんは凄いですよね。物理学者の武谷三男さん。

神田 はい、三十年前にすでに「二十世紀のファッションの主流は防護服になる」って書いた方です。親しくいろいろ教えてくれましたよ。彼が書いたものは、今ほとんど当たっているんです。

佐高 神田さんが書き下ろした講

談、『女医レニヤの物語』で知ったんですが、武谷三男夫人も大した人なんですよ。元はロシアの亡命貴族でしょう。

神田 武谷ピニロピさん。バルチック艦隊の艦長の娘で、両親がロシア革命で追われて逃げている最中、ハルピンへ向かう列車の中で産まれたんです。やがて七歳で会津若松に移ってきました。会津女学校から女子医専（現・東京女子医大）に進んで医者になるんです。子どもの頃は金髪で二つ編み、きれいな少女だったから、近所の子どもがみんな付いてまわったそうです（笑）。

佐高 レニヤとピニロピって、どちらが正しい名前ですか？

神田 「ピニロピ」が本名で、「レニヤ」が愛称ですね。ロシア人は

誰でも二つ名前を持っているそうです。「ピニロピ」はギリシャ神話の女神の名前です。

名前の通り、彼女はとても優しい方。自分の病院を建てても、貧しい人からは診察代も薬代も取らないで診ていた頃がありました。その代わり、患者さんは野菜を置いていつてくれたりしたそうです。

佐高 私も診てもらったことがあ



るんですが、そのときは怖かったような(笑)。実際に、病院にも行きましたか。

神田 行きましたし、その後私はあそこで娘二人を出産しています。

佐高 その頃は講師になろうとは思っていなかったんですか？

神田 趣味でやっていこうかなと思っていた時期でしたね。当時、夫が病気にかかっていたので、看病もありましたし。でも、軍談(軍記物)の調子を勉強すると、夢中になってしまっ。お経のリズムと同じなんです。不思議と、看護のストレスがなくなりました。

佐高 なぜ講師の道に行くことになったんですか？ もともとは舞台女優志望だったんです。ね。

神田 志望というより、体験という気持ちだったんです。二、三年くら

いお芝居を齧って、東京の空気を吸ったらいわきに戻ろうと思っていました。でも、いざ養成所に入ったら、喋るたびに笑われて、傷つきましたね。

佐高 ああ、方言で。

神田 そうなんです。新劇の固いところでしたから、ちよつとしたイントネーションの違いでも直されて、あの頃は喋るのがすっかり嫌になってしまいました。

詠みたいものが詠めない

佐高 ちなみに、俳句はされますか？

神田 講談のお客さんたちの会に混ぜてもらって、月に一回句会に参加していました。日本橋のすきやきか、神田のはまぐり鍋のお店

でやっていたので、どちらかという、それを目当てに行っていた(笑)。今日、作った句を持ってきてみたんですけど、これです。

佐高 〈夜ノ森の桜ひとつこ一人なし〉。なるほど。

神田 桜が絢爛に咲いているのに、誰も見てくれる人がいない。その桜の気持を詠んだつもりです。まだまだですね。

こんなもあります。(波高し放射能雲来る勿れ)。

佐高 なるほど。福島県と茨城県との県境の勿米なごめの関にかけたんだ。

神田 いわきの名産「ウニの貝焼き」でも一句(貝焼きのウニや口シアのかなたから)。新鮮なムラサキウニをホッキ貝の殻に山盛りにして蒸していただくんです。一個二千円くらいするのだけど、ど



んなにお金がなくても、これだけは帰郷するたびに、奮発して買っていたんです。でも、3・11以来、

採ることが禁止されていますから全くありません。たまに都内の物産展で「ウニの貝焼き」と出ていてもみすばらしい量で、チリ産やロシア産のウニなんです。「波高し」も「ウニの貝焼き」も季語になるかどうか（笑）。

佐高 放射能も、どんどん福島だけの話になっていくでしょう。

神田 はい、残念ながらその通り

です。そうはさせまいと、いわき市出身者が中心となって「ふくしま支援・人と文化ネットワーク」（NPO申請中）という団体を立ち上げ活動しています。放射能には人間が勝手に分けた行政区は関係ないですからね。葛飾区や柏、松戸、那須塩原などにもいわきより高いところがありますから、福島だけと考えていたら危険です。

佐高 香織さんは、チェルノブイリには行ったことあるの？

神田 六年前にベラルーシに行きました。立ち入り禁止の村に十分間だけ入りました。その村よりも、郡山市・福島市の方が線量が高い。ゴメリとか、ちよっと高地に行くと、孤児院があつて、子どもたちが大勢収容されているんですが、その土地では元気に生まれて

くる子どもは十人に二人なんです。あとの八人はみんな虚弱。体が小さいですし、知能障害がある子がほとんどです。日本も四、五年後には子どもたちが……。それが分かっているから、とても悔しい。ですから、私たちは保養地の斡旋も始めました。

今は、「避難」と言わないで「保養」と言うんですね。二週間くらい空気の綺麗なところで安全なもの食べていると細胞がリフレッシュするので、頻繁に「保養」してもらおうと呼びかけています。福島県は、県民が大勢転出すると税金が減るので、逆に逃がすまいとしているようです。一月にいわきへ行った際、ガソリンスタンドに、「福島県からの避難は保護者のつとめではありません」とってピラ

が貼ってありびつくりしました。

佐高 福島県立医科大学の山下俊一副学長の発言もね。

神田 ひどいですよ。あの人は子どもに向けて、ニコニコ笑ってれば放射能の被害は受けませんが、クヨクヨしていれば受けますから明るくしなさい——というような事を言ったんです。こんな屈辱的なことないじゃないですか。

講談に出来ること

佐高 今、主にやっている講談はなんですか。

神田 『チェルノブイリの祈り』や『はだしのゲン』、『フラガール物語』などですね。今、スパリゾートハワイアンズが復興しつつあるので、喜んでくれています。応援したい

って言うてくださる方も多い。この間も都内で講談を聞いてくれたお客様が、社員旅行で予約を入れてくれたんですよ。こうして実際に動いてくれる方がいると、すごく嬉しいですね。

他には、『稲むらの火』という、津波の講談をしています。これは、江戸末期に和歌山県で実際に起きた地震をもとにした話。奇策で津波から村人を救った、五兵衛という人の物語なんです。そのモデルとなったのが濱口樗陵さんという方。これはぜひ講談にして広めたいと思った。

佐高 新作ですか？

神田 いえ、五、六年前からやっています。いわきでもやりたいと思って、いわき市役所に声をかけたら「ここは津波なんてこねえ！」

と(笑)。

佐高 3・11の前ですね。

神田 そうです。二回行きました。3・11の半年前の十月にも行っている。でも、何回行っても「ここに津波は来ない」の一点張り。三月に津波が来たとき、やっぱり地元の方々は、津波に対して予備知識がなかったですからね。知っていたら助かった命があったのに……。三一〇人(二〇一二年三月十四日現在)亡くなっていますから。





悔しいですね。

佐高 3・11の後は呼ばれましたか。

神田 二回呼んでももらいました。でも、3・11の前にやりたかった

ですよ。本当に、もう……。

佐高 今仕込んでいる講談はあるんですか？

神田 今は取材を重ねている最中です。震災に遭われた方々の体験

をお話ししたりはしてませんが、一席の読み物としてはこれからです。講演のときは『チェルノブイリの祈り』の抜粋を中に入れたりもしています。

佐高 香織さんは、普段の生活では喜怒哀楽激しいの？

神田 仕事で力を使いきるので、普段の生活は能面のごとく生きていますよ。喜怒哀楽なし。

佐高 本当ですか？(笑)

神田 本当です(笑)。普段は力を蓄えようという感じです。周りの人の方が喋るので、私は黙って聞いている方。もし、普段の生活を自分の晴舞台だと思っていれば、講談はやめなきゃいけない。自分の能力は限りがあるので、それをどこで使うかですね。